

- I. ようこそ
- A. おはようございます！おはようございます！カルバリー・チャペル岩国へようこそ。今日、皆さんとここにいることができて嬉しい。
1. 初めにお越しの方や、オンラインで視聴されている皆様、ようこそ。
- B. 本題に入る前に、小学生のお子様たちを日曜学校の教室へ送り出そう。
1. (第2礼拝：聖書英語クラスも同様)
- C. 子供たちが移動している間、残りの皆さんは聖書を開き、ヨハネの福音書第5章を開いてほしい。
1. もし聖書が必要な方は、遠慮なく手元にある聖書を取り出してください。周囲の椅子の下に置いてある聖書から借りて構わない。私たちは、一節ずつ聖書を読み進めていく中で、ご自身で御言葉を読めることが重要だと考えている。
2. 今朝は、私が「イエスによって癒やされた」と題したメッセージの中で、ヨハネの福音書第5章の前半を取り上げる。
3. 今日の聖句は、ユダヤ教の年次祭りの一つが行われていたエルサレムで、ある男が癒やされた出来事の詳細について語っている。
4. この箇所を読み進める中で、私たち自身の生活にとって重要な真理や原則をいくつか見出せることを願っている。神の御言葉を受け取り、そこから学び、そしてそれを私たちの生活に適用できるようになることを願っている。
- D. それでは、前置きはこれくらいにして、早速本文を読み進めていこう。
1. 可能であれば、神と神の聖なる御言葉を敬うために、皆さん全員に立ち上がっていただきたい。
2. 私は自分の聖書から、この箇所を最初から最後まで読み上げる。使用する聖書はNKJV版だ。他の翻訳版を読んでいる人は、私が読むのに合わせて、自分の聖書でできるだけ追いかけてほしい。
3. ヨハネは第5章を次のように始めている…… (R & P)
- II. はじめに
- A. 今朝の聖書箇所において、ヨハネはイエス・キリストの生涯と宣教に関する記述が続いている。
1. ヨハネが、起こったすべての出来事を時系列に沿って詳細に記述しようとしていたわけではないことを心に留めておく必要がある。
2. そのようなことは不可能だからだ。
- a. ヨハネは福音書の結びで、イエスがなされたことは他にもたくさんあり、もしそれらを一つひとつ書き記すなら、その書物は世界全体でも収まりきらないだろうと述べている。[ヨハネ 21:25]
- b. ヨハネによる福音書第20章で、彼はこう記している。「イエスは、弟子たちの前で、この書物に書かれていない多くのしるしをなされた。」

しかし、これらが記されたのは、あなたがたがイエスがキリスト、神の御子であると信じ、また、信じることによって、御名によっていのちを得るためである。」(ヨハネ20:30-31)

3. ヨハネがこれらの記述を記した目的は、私たちがイエスがキリストであり、神の子であると信じ、またイエスを信じることで永遠の命を得られるようにするためである。
- B. ですから、ヨハネが記した様々な出来事を学ぶにあたり、その記述がどのようにイエスをキリスト、神の子として示しているか、またイエスへの信仰がどのように命をもたらすかを、見極めるべきである。
1. 今朝の聖句では、イエスがキリスト、すなわちメシアとして描かれていることがはっきりと見て取れる。イエスは、38年間も病を患っていたある男を癒すことによって、ご自身がメシアであることを示されたのだ。
- a. ユダヤ人たちは、メシアが現れたとき、足の不自由な者、病める者、盲人を癒す力を持つと信じていた。預言者イザヤが預言したように、メシアは私たちの病を負い、私たちの病を背負うのだと。(マタイ8:17)
2. また、安息日にこの癒しを行う権威を持っていることを示すことで、ご自身が神の子であることを明らかにされる。
3. しかし、これらすべてを行うことは、結局のところいくつかの問題を引き起こすことになる。
4. この出来事後、イエスは宗教指導者たちからの迫害を受け始め、それは公の宣教活動の残りの期間を通じて続き、最終的にはカルバリの十字架での磔刑へとつながることになる。
- C. イエスによって癒やされたこの男の物語を、いくつかの小見出しに分けて検討し、そこから私たちがどのような教訓を得られるかを見ていこう。
- D. まず、1節と2節に記されている「癒やしの場所」から見ていこう。

III. ヨハネ5:1-2；癒やしの場所

- A. 本文は「その後」という言葉で始まっている。これは、第4章の終わりに起こった、高官の息子の癒やしの出来事を指している。
1. この出来事が、高官の息子の癒やしからどれほど後に起こったのかは分からない。ただ、その後が起こったということだけだ。
2. 繰り返しになるが、ヨハネの意図は、詳細な年代順の記述を私たちに与えることではない。彼の焦点は、イエスがキリストであることを示す出来事と、イエスを信じる重要性を浮き彫りにすることにある。
- B. ガリラヤでの宣教を終え、高官の息子を癒した後、イエスは再びエルサレムの町へと戻った。
1. ユダヤ人の祭りが行われていたため、イエスはエルサレムへ向かうことにした。
2. どこから来ようとも、エルサレムへは常に上り坂となる。なぜなら、エルサレムはユダヤ山地の台地上、海拔約2,500フィートの高さに位置し、周囲はより深い谷に囲まれているからだ。したがって、エルサレムへは常に上り坂を旅することになる。

- C. どの祭りだったかは明記されていないが、健康な成人男性全員の参加が義務付けられていた年三回の祭りがあった。
- a. 過越の祭り（これらは一日ずつ続くため、しばしば無酵母の祭りとの併催となっていた）
 - b. 七週の祭り（ペンテコステとも呼ばれる）
 - c. そして3つ目の年次巡礼の祭りは、初秋に行われる仮庵の祭り、あるいは「仮庵の祭り」とも呼ばれるものだった。
2. イエスはガリラヤに到着したばかりのように見えたにもかかわらず、わざわざエルサレムに戻ったようであることから、イエスが参加していたのはこれら三つの祭りのいずれかであった可能性がある。
- D. 本文によれば、エルサレムの羊の門のそばに、ヘブライ語でベテスダと呼ばれる池があり、その池の周囲には五つの回廊が建てられていたと記されている。
1. 羊の門がどこにあったかは、ネヘミヤがエルサレム周辺の城壁を再建した際、様々な門とその位置について詳しく記しているため、我々は知っている。
 2. 羊の門は、エルサレムを取り囲む城壁の北東部に位置し、神殿の丘のすぐ北にあった。
 3. そして、イエスの時代、その池は実際には正式な城壁の外側に位置していた。その後、1世紀^{半ば}に城壁の拡張工事が行われた際、城壁の内側に組み込まれることになった。しかし、イエスが訪れた当時は、城壁の外側にあったはずだ。
- E. この池の名前は、「憐れみの家」を意味するヘブライ語・アラム語の単語を音訳したものである。
- F. さて、このベテスダの池について興味深いのは、19世紀に聖書学界に高等批評の波が押し寄せ、批評家たちが「そのような場所は存在しなかった」と主張した点だ。というのも、その場所に関する世俗的な歴史的記録が存在せず、記述された地域においてそのような池の存在を示す考古学的痕跡も発見されなかったからである。
1. しかし、1888年、考古学者たちが聖書に記された場所、すなわちエルサレムの城壁にある羊の門のすぐ外側で、その水池を探し始めることになり、状況は一変した。
 2. するとなんと、土を掘り進めたところ、何が見つかったと思うか？ 彼らは一つの水池だけでなく、二つの水池を発見したのだ。そしてそのうちのひとつの水池は、聖書のヨハネによる福音書第5章2節に記されている通り、五つのアーチ型の列柱に囲まれていた。
 3. 考古学という科学は、繰り返し**聖書の正確さと信頼性を証明**している。我々の手元にある聖書は、作り話のおとぎの国について書かれたものではない。そこには実在する場所があり、これらは歴史的出来事の実録なのだ。
 4. イエスはこの場所を訪れた。今日、エルサレムを訪れれば、ベセスダの池の遺跡を見ることができ、そこは、12世紀に十字軍によって建てられた美しい

12世紀に十字軍によって建てられた聖アンナ教会という美しい教会のすぐ外にある。それは実に驚くべき光景だ。

- G. さて、「癒やしの場所」について触れたところで、3節の前半にある「**癒やしを必要とする人々**」に注目しよう。

IV. ヨハネ5:3a；癒やしを必要とする人々

- A. この池を取り囲む五つの屋根付き回廊の中には、大勢の病人が横たわっていた。

1. 彼らは、病気の人、盲人、足の不自由な人、そして麻痺した人（あなたの訳では「萎えた」と読めるかもしれない）と描写されている。
2. ここで言う「病人」とは、高熱や鼻水、咳に悩まされているような人々を指すのではない。この言葉には、力がなく、無力であるという意味が含まれている。彼らは無力な人々、つまり身体障害者だったのだ。長期的な介護を必要とする慢性疾患を抱えた人々である。
3. 中には盲人や足の不自由な人、麻痺した人もいれば、手足が萎えた人もいた。これらの人々は悲惨な状況にあった。

- B. そして彼らは皆、癒やされることを願って、その場所の入り口の下に集まっていた。3節の残りとも4節を見てみよう。そこでは「**癒やしの可能性**」について語られている。

V. ヨハネ5:3b-4；癒やしの可能性

- A. さて、読んでいる聖書によっては、3節の残りとも4節が収録されていない人もいるだろう。

1. 聖書の版によっては、脚注のような記号があり、聖書の末尾や中央の欄（参照箇所がどこに配置されているかによる）に目を通すよう指示されている場合がある。
2. 一部の聖書に3節の残りとも4節が含まれていない理由は、原典によるものだ。聖書の翻訳者によって、翻訳に用いる原典が異なるからだ。
3. これらの節の収録に批判的な人々は、これらが7節で語られる内容を理解しやすくするために、初期の写本家によって書き加えられたものだとして主張している。
 - a. 現在、すべての聖書には7節が収録されている。7節をさっと見てみると、イエスが近づいた男が、水が攪拌される時に自分を入れてくれる人がいないこと、あるいは自分より先に誰かが水に入ってしまうことについて、イエスに語っているのが分かるだろう。
 - b. この節の意味を成立させるため、批判派は、書き手がこの男の反応を説明するためにこれらの節を挿入したが、ヨハネの福音書の原本には3節の終わりとも4節全体が含まれていなかったと示唆している。
 - c. 問題はここにある。誰も原本を持っていない。誰も原本に基づいて翻訳していない。我々は原本を持っていないのだ。我々が持っているのは、写本の写本の写本に過ぎない。そして、最も古い写本（写し）の中には、3節の終わりや4節が含まれていないものもある。

- d. そこで、最も古い写本の写しにはそれが見当たらないことから、おそらく後世に挿入されたものだと考える人もいる。しかし、それは初期の段階で除外され、後の写本で修正されたものと見なすことも同様に可能だ。正直なところ、私たちは知らないのだ。
4. それが含まれているか否かは、情報の内容をそれほど変えるものではない。同じことを述べている7節はすべての写本に含まれているため、本文の理解を変えるような追加情報というわけでもないのだ。
- B. ここで興味深いのは、天使が現れて池の水を攪拌し、ある幸運な男が病を癒される機会を作り出すという、ここに描かれた情景だ。
1. さて、これを行ったのが主から遣わされた本物の天使だったのか、それとも単なる民話のようなものだったのか、あるいは異教の儀式や慣習とより深く結びついたものだったのかについては、多くの議論がある。
2. これは天からの正当な働きだったのだろうか？「憐れみの家」で水を攪拌し、最初に水に入った者に助けと癒しをもたらすために、主が遣わした天使だったのだろうか？確かに、その可能性はある。
3. あれほど多くの人々がその場に留まっていたこと（本文には「大群衆がそこにいた」とある）を考えると、癒やしを期待して人々が留まり続けたような出来事が起きていたと私は思う。
4. この場所は癒やしをもたらすことで知られていたようだから、こうしたことが時折起きていたのかもしれない。
5. しかし、これがある種の異教の儀式と関係していた可能性も同様にあり、むしろそちらの方が可能性が高いかもしれない。
6. 実際、考古学者たちがベテスタの池の遺跡を発掘した際、ギリシャの癒しの神アスクレピオスへの数多くの碑文が見つかった。
7. この時代には、アスクレピオスが崇拝される「癒しの中心地」と呼ばれる場所が存在した。実際、古代のギリシャ・ローマ世界では、アスクレピオスの神殿は、司祭が操作する地下のサイフォンやパイプを利用して、予期せぬタイミングで水を噴出させることで知られていた。異教の巡礼者たちは、この突然の泡立ちを、癒しの神が水の中を移動する現れだと見なしていたのだ。
8. これは、癒やしの準備として天使とされる存在が水をかき混ぜるという行為と、非常に似ている。
- C. これが本物だったのか偽物だったのか断言はできないが、私は、これは異教の慣習に根ざした何らかのデマであった可能性が高いという見方に傾いている。
1. 敵がしるしや不思議を行い、奇跡を起こす能力を持っていることは知っている。そして、その目的のほとんどは破壊にある。
2. しかし、それは通常、最終的な目的だ。敵の望みは、欺き、注意をそらし、目をくらませ、そして破壊することにある。
3. 彼らが引き起こす一時的な癒しによって、人々が偽りの希望に縛り付けられる可能性もある。

4. このいわゆる天使による癒しの結果を考えてみよう。
- a. それは、神殿の壁の外にいる大勢の人々を、神と神殿での礼拝から遠ざけていたのだ。
- b. それは、めったに、あるいは決して満たされることのない、偽りの希望を生み出していた。水が揺れ動くたびに「癒やされる」のはたった一人だけであり、他の皆は病んだまま、しかし「次は自分が幸運な一人になれるかもしれない」という期待を抱いて、その場に留まり続けていたのだ。
- c. この仕組みは、神の御性質とは一致していないようだ。この仕組みは、速さ、力、運、そして自己努力を報いる。水に一番乗りした者が癒やされるのだ。それは憐れみを生むどころか、競争を生む。愛や慈しみが高められる代わりに、自分には能力が足りない者たちの間に嫉妬と絶望を生み出す。
- d. 人々は神に希望を置くのではなく、儀式に希望を置いている。これは、主を真に栄光に帰するものというよりは、むしろ偶像崇拜のように聞こえる。
- e. これから見ていくように、イエスがその男と関わった際にも、イエスは「私があなたを水の中に入れてあげようか」とは言わなかった。あるいは「私が水をかき混ぜて、あなたを一番に水の中に入れてあげようか」とも言わなかった。イエスは基本的に、その男に、なぜそこにいたのか、本当に癒やされたいのかと尋ねたのだ。
- f. イエスは、そこで行われていたことに何の価値も認めなかった。彼は男の注意を池に向けさせるのではなく、自分自身に向けさせたのだ。おそらく、男が間違っただけに集中するのをやめ、代わりにイエス自身に集中し始めるようにするための方法としてだったのだろう。
5. 繰り返しになるが、そこで何が起きていたのか正確には断言できない。しかし、主のあり方としては少し異例に思える。神がそのようなことをなさるだろうか？もちろん、なされる。神である以上、神は望むことは何でもできる。だが、私にはどうしても腑に落ちない。そのため、これはヨハネが異教の慣習を伝えたものであり、必ずしも神を敬う慣習ではなかったと私は考えている。
- a. 中には、エルサレムの城壁のすぐ外で行われていた異教の慣習を、神の言葉を使って描写するという考えを好まなかったため、最も初期の写本の一部がこれらの節を除外したのではないかと示唆する者さえいる。
- b. まあ、それが異教的なものであれ、純粋な信仰によるものであれ、その男が最終的に癒やされたのは、その池や水の動き、あるいは誰よりも先に水に入ることができたことは全く無関係だったのだから、その区別は結局のところ、この物語に何の影響も及ぼさない。

D. 本文を読み進め、5節と6節に記されている「癒やしに関する優先順位」を見てみよう。一緒に読んでみよう。

VI. ヨハネ5:5-6；癒やしに関する優先順位

- A. ここで、その池のそばにいて、38年間も病を患っていたある男が紹介される。
1. これはおそらく後で触れるべき重要な点だが、ひとまず話を進めよう。

- B. イエスは彼がそこに横たわっているのを見たときと記されている。この表現は、単なる偶然の視線ではなく、イエスが彼を見つめた際に、その男を深く捉え、彼の状況を理解していたことを示唆している。
1. イエスは、彼が長い間その状態にあったことを知っていたと記されている。フィリポがナタナエルを主に招く前に、イエスがナタナエルについてすべてを知っていたのと同じように。サマリヤの女が口を開く前から、彼女の不道德な生活様式についてすべてを知っていたのと同じように。イエスは私たち一人ひとりのことをすべて知っている。
 2. 主は私たちの人生の細部まで知っている。私たちが何を経験し、何と格闘し、何に心を向けているかを知っているのだ。
- C. イエスはこの男の状況を知っていた。彼が長い間、そのような状況にあったことを知っていたのだ。だから、イエスは彼に近づき、「治りたいか」と尋ねた。
1. 表面的には、この問いを読んで「何て質問だ？ もちろん治りたいに決まっている。なんて馬鹿げた質問だ」と思うかもしれない。
 2. 実に奇妙な問いであり、なぜイエスがこのような質問をしたのか、私は本当に不思議に思う。イエスはこの男の状況を熟知していたのだから、なぜ彼に「治りたいか」という希望を尋ねたのか、そこには理由があるに違いない。
 3. もしかすると、もしその場所が異教の儀式が行われている場所だったなら、イエスは彼がなぜそこにいるのかを問うために、この質問をされたのかもしれない。まるで、彼の信仰がどこにあるのか、そして彼が本当に何を望んでいるのかを問うかのように。
 4. 何度も失敗し、決して一番乗りで水に入ることができなかった後では、この男は癒やされることへの希望や関心を、心底失っていたのかもしれない。絶望しか残っていない場所に、ほんの少しの希望を呼び起こすために、イエスはこの質問を投げかけたのかもしれない。
 5. 人生において、私たちは時として、自分のマナーに深くはまり込み、そこに安住し、それを墓場にしてしまうことがある。そこで努力することをやめ、ただ諦めて、絶望的な人生に屈してしまうのだ。
 6. イエスの「治りたいか」という問いは、真剣な問いだ。それは、私たちの一部や、私たちが置かれている状況に対して、イエスが投げかけることのできる問いでもある。私たちは希望を捨て、神が私たちのために望んでおられるものよりも、それ以下のものに甘んじることを決めてしまったのだろうか。
 7. 時に私たちは、神が与えてくださる最善のものよりも低い水準で妥協してしまうことがある。それは、何か違うことをしようとする努力を惜しみ、自分の人生に真の変化が起こることを許そうとしないからだ。
 8. イエスはこの男に、彼の望みを尋ねている。本当に何が欲しいのか。心から癒されたいと願っているのか。
- D. 7節の「**癒やしに対する見方**」に注目しながら、この男の答えを読んでみよう。
- VII. ヨハネ5:7；癒やしに対する否定的な見方
- A. イエスに熱意あふれる「はい」と答える代わりに、この男はただ、なぜ自分が癒やされないのかという言い訳を並べ立てた。

1. *彼には助けてくれる人がいない。彼自身、動きが鈍い。いつも誰かに先を越されて、水にたどり着けないのだ。*
 2. 人生において、障害があまりにも大きすぎて乗り越えられないと感じる時がある。私たちは希望を失い、神による奇跡を信じたり、神が私たちの人生の中で、そして私たちを通して働いてくださることを信頼したりする代わりに、神の最善よりも劣るものに甘んじてしまう。
 3. 神が成し得る可能性を見る代わりに、私たちが見るのは、主から受け取ることを妨げ、私たちを壊れた状態に留め、立ち足る障害を乗り越えられないようにしている障害ばかりだ。
 4. 私たちは主から目を離し、障害や障壁にばかり目を向け、それらを乗り越えることは決してできないと感じてしまう。
- B. おそらく、イエスがその質問をしたのはそのためだろう。おそらく、イエスはこの男に、池に目を向けるのをやめさせ、癒されるのを妨げる障害に目を向けるのをやめさせ、自分自身に目を向けるようにさせようとしたのだ。
1. イエスは、この男の注意を引くためにその問いを投げかけたのかもしれない。障害物から目を離させ、イエスが「癒されたいか」と問いかけるその瞳を見つめさせるために。
 2. 私たちが直面する問題や障害に時間と注意をすべて注いでいると、主や主がなさろうとしていることに目を向けることは決してない。私たちは自分の置かれた状況から目を離し、**主に向けなければならない**。
 3. 主に向けるとき、障害は背景へと薄れていく。主に向けるとき、かつては困難で乗り越えられないと思えた障害も、少しずつ小さく見え始め、克服できないほど不可能なものではなくなるのだ。
 4. 心の願いを主に注ぐとき、私たちはそれらの障害を主の光の中で見ることができるようになり、偉大なる神であり救い主である主の力に比べれば、それらの障害など何でもないことに気づき始める。私たちは、状況に疑いを抱くのではなく、主に信頼を置くことができるのだ。
- C. イエスは、ご自身の力を示すことで、その男に答えた。「**癒しへの力**」に注目しながら、8節と9節の前半を見てみよう。
- VIII. ヨハネ5:8-9a；癒しへの力
- A. イエスはこの男に、三つの単純で率直な命令を下した。「起きなさい」「床を担ぎなさい」「歩きなさい」である。
1. イエスは、この男に癒やしに必要な力を与えようとしていた。しかし、この力を受けるためには、彼はイエスの命令に従って行動しなければならなかった。彼は、過去38年間、自分には物理的に不可能なことだったことを、イエスを信頼して行わなければならなかったのだ。
 2. イエスは彼に、不可能なことを行い、不可能なことについてイエスを信頼するよう命じたのだ。
- B. そして、その男はまさにそうした。彼は奇跡を信じてイエスを信頼し、するとすぐに癒やされ、寝床を担いで歩き出したと記されている。

1. この男がその日学んだことは、神の命令こそが、私たちに力を与える源になり得るということだ。神は、私たちにそれを成し遂げる力を与えずに、何かを命じることは決してない。
2. もし神が私たちに何かを呼びかけているなら、その召しを果たすために必要なものを**神は備えてくださる**。
3. 私の牧師であるリック・バーネットは、いつもこう言っていた。「神は電池を用意してくださる」。まるでクリスマスの朝、靴下を開けて中に電池が入っているのを見つけた子供のように。ツリーの下に、その電池が必要な何かがあることを知っているから、ワクワクするのだ。
4. 神が私たちを何かに召される時、その召しを果たすために必要なものを与えてくださる。神は必ずしも「備わった者」を召されるわけではないが、召された者には必ず備えを与えてくださる。
5. 神があなたに求めていることが何であれ、その召しを果たすために必要なものはすべて神が備えてくださることを知れ。

C. この男は、癒やしに向けた力を受けた。彼はイエスの命令を力として受け入れ、イエスが命じたことを忠実に実行した。立ち上がり、寝床を拾い上げ、およそ38年ぶりに歩いたのだ。信じられないことだ。

D. 物語はそこで終わると思われよう。そしてその男は夕陽の中へと歩き去り、その後ずっと幸せに暮らしたのだ。しかし、「**癒やしには問題**があった」。9節の残りとも10節を見てみよう。

IX. ヨハネ5:9b-10；癒やしにおける問題

A. 何が問題だったのか。問題は、この癒しが安息日に行われたことだった。

1. 安息日は休息の日であるべきだった。人々が重荷を背負うことから解放される日。人々が休息し、主とその恵み、そして自分たちの人生に注がれる祝福について思いを巡らせる日である。
2. それはまず主ご自身が模範を示された。六日間で世界とそこにあるすべてのものを創造した後、主は休み、七日目に御業を休まれた。御業は完了し、すべては良かった。
3. その後、主はイスラエルの民に「安息日を覚えて、それを聖なるものとせよ。六日間は働いて、すべての仕事を成し遂げよ。しかし、七日目はあなたの神、主の安息日である。その日には、あなたも、あなたの息子も、娘も、男奴隷も、女奴隷も、家畜も、あなたの門内にいる寄留者も、いかなる仕事もしてはならない。主は六日間で天と地と海、そしてそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからだ。それゆえ、主は安息日を祝福し、聖別された。」（**出エジプト記 20:8-11**）
4. つまり、六日間はすべての仕事をなすべきであったが、七日目は仕事をしてはならない。それは安息日、すなわち休息の日である。

B. 10節によると、ユダヤ人——ヨハネは福音書の中でしばしば宗教指導者をこう呼んでいる——は、その男が床を担いで運んだことを、彼にとって違法な行為だと非難した。

1. つまり、ユダヤ人、すなわち宗教指導者たちがしたことは、安息日に仕事をしないようにするため、仕事とは具体的に何を指すのかを定義しようと試みたのだ。
2. その結果、彼らは仕事を39の異なるカテゴリーに分類し、それらを安息日に禁じられたものとした。
 - a. そこには、耕す、種をまく、刈り取る、集める、脱穀する、ふるい分けるといった農業的な作業が含まれていた。
 - b. また、織物に関する作業、すなわち織る、糸を分ける、結び目を作る、結び目を解く、切る、縫う、あるいは裂くといった行為も禁じられていた。羊毛を刈る、漂白する、もつれを解く、染める、紡ぐ、縦糸を張る、あるいは織る準備をすることも禁じられていた。
 - c. 台所での作業も禁じられていた。選別、粉碎、ふるい分け、こね、焼き上げは一切許されなかった。
 - d. 罌を仕掛けること、屠殺すること、皮を剥ぐこと、塩漬けにすること、滑らかにすること、線を引くことも禁じられていた。建物を建てることも、壊すこともできなかった。とどめを刺すことはできず、つまりはどんな作業も完了させてはならないということだった。
 - e. 火を点けることも、消すことも禁じられていた。二文字を書くことも、二文字を消すこともできなかった。
 - f. そして最後に、物を運ぶことも許されなかった。
 - g. 物を運ぶことに対する具体的な規則はさらに詳細化され、公共の場所から私的な場所へ、あるいはその逆、私的な場所から公共の場所へ物を運ぶことも含まれていた。
 - h. つまり基本的に、安息日に家を出る場合、持ち出せるのは身に着けている衣服だけだった。ポケットの中に何かを入れて持ち歩くことさえ、安息日の違反とされた。したがって、財布も、鍵も、携帯電話も持ち出せなかった。
 - i. ユダヤ人たちは、主の備えと恵み、そして主の中にある安息を思い起こさせるために、主から民に与えられた安息日の賜物を、人々を労働日よりさらに縛りつける巨大な律法主義的な制度に変えてしまったのだ。

3. この男が寝床を運んだ行為は、神の律法に反するものではなく、彼らが解釈した神の律法に反するものであった。それは、代々受け継がれてきた口伝の伝統に背くものだった。物を運ぶことは労働とみなされたため、彼らによれば、この男は安息日を破ったことになる。

C. これらの人々は、神がご自分の民に与え、祝福となるはずだったものを、重荷に変えてしまったのだ。

1. これらの宗教的権威者たちは、自分たちの神の律法に対する解釈を、神の律法そのものよりも上位に置いた。そして、誰もが自分たちの解釈に従い、それに従うことを期待したのだ。

2. こうして律法主義は育まれる。自分たちの信念や解釈を、他の人々にも従うことを期待し始めると、ユダヤ人が安息日に関して行ったのと同じように、律法主義的な体制を作り上げてしまうことになるのだ。
3. 自分の解釈や信念を他人に押し付け、自分と同じように生きることを期待しないよう、注意しなければならない。
4. パウロはローマ人への手紙の中でこの点に触れ、平和をもたらすことや、互いに建て上げることに努めるよう述べている。（**ローマ14:19**）
5. 彼は人々に、神の前で自分自身の信仰を持つよう励ました。個人的な信念は自分の中に留めておくように。（**ローマ14:22a**）
6. また、心の中で、だれをも裁かず、主にある兄弟姉妹の足かせとならないようにと決心するよう促した。（**ローマ14:13**）
7. 律法主義を許し始めると、それは必ずトラブルを招く。そして、まさにそれがこの箇所で起こっているのだ。

D. 11～13節の「癒やしから生じた苦境」を見てみよう。

X. ヨハネ5:11-13；癒やしから生じた苦境

A. その男は宗教指導者たちに答えた。「私を癒してくださった方が、『床を担いで歩きなさい』とおっしゃったのだ。」

1. この男は、38年以上も患っていた病から癒やされた結果、寝床を担いでいた。この男は正しく見抜いていた。もし主が彼を癒やす権威を持っていたのなら、主が命じた通りにすべきだと。
2. この男の主張は、「私はただ、私を癒やしてくれた人が言った通りにしただけだ」というものだ。

B. そして、これは今日の聖書の箇所で見られる、より大きな全体像を示していると思う。

1. イエスは、毎年行われる祭りの一つが行われている時期に、エルサレムにおられた。その場所は人で溢れかえっていた。律法に従って犠牲や供え物を捧げるため、ユダヤ人たちが神殿の丘のエリアへと次々と押し寄せていたのだ。
2. しかし、その壁の外には、病に苦しみ、傷ついた大勢の人々がいた。癒やされる希望も、神が自分たちの人生に働きかけてくださる希望も、すべて失ってしまった人々だ。彼らの体は機能不全に陥っていた。
3. イエスは意図的に、38年間も病に苦しんでいた男を選ばれた。38年間で、ユダヤ人が砂漠を目的もなくさまよった年数と全く同じである。彼らはシナイ山で2年間宿営し、その後38年間、死を待つばかりに砂漠をさまよったのだ。
4. イエスは安息日にこの男のところへ来られた。イエスはその日が何の日であるかを十分に承知していた。この男を癒した時、イエスが「おっと、安息日だったのを忘れていた」などと思ったわけではない。
5. イエスは、この男を癒す際、特に「起き上がり、床を担いで歩きなさい」と命じた。単に「起き上がって歩きなさい」と言うのではなく、「起き上がり、床を担いで歩きなさい」と言ったのだ。

a. もし私があの足の不自由な男だったら、この38年間転がり回ってきたその寝床とは一切関わりたくないだろう。火をつけて燃やし、破壊し、それとは一切関わりたくないと思うはずだ。しかし、イエスが持ち上げて運べと言ったので、彼はそうしたのだ。

6. イエスはこの状況を利用して、宗教指導者たちに対する主張を展開しているのだと私は信じている。イエスは、その男が安息日に寝床を運んだことで捕まることになることを、十分に承知していた。だからこそ、そうするように命じたのだ。
7. イエスは、この男を絶望的な努力や自己治療の試みから救い出したいだけでなく、主よりも伝統を重んじる宗教指導者たちの偽善と対峙したかったのだ。
8. イエスは一石二鳥を狙っている。この男に肉体的な癒やしをもたらすと同時に、その状況を利用してユダヤの権威者たちに立ち向かうのだ。

C. 38年間も病に苦しんでいた男が癒やされた時、ユダヤの指導者たちがどう反応したか見てみよう。彼らは言った。「『床を担いで歩け』と言ったその男は誰だ？」

1. 「誰があなたを癒したのか」「どうやってそんな恐ろしい、命に関わる状況から治ったのか」とは尋ねなかったのだ。
2. 彼らが気にしていたのは、自分たちの伝統が破られたことだけだった。この男の癒やしや、彼の人生が一瞬にして根本から変わったことなど、彼らは全く気にかけていなかった。そんなことなどどうでもよかったのだ。これらの人々は、民に対して主を代表し、主について教えるべき立場にあった。しかし、彼らは民のことを全く気にかけていなかった。彼らが気にしていたのは、自分たちの伝統に従うことだけだった。
3. そして、その偽善こそが、イエスが第5章の残りの部分で取り上げるテーマだ。主の御心があれば、来週それについて見ていくつもりだ。

D. さて、その男が置かれた苦境とは、癒やされた興奮のあまり、自分を癒やしてくれたのが誰なのかさえ分からなかったということだ。彼らが「誰か」と尋ねたとき、彼は本当に答えられなかった。なぜなら、イエスは彼を癒やした後、群衆の中から立ち去っていたからだ。

E. それでは、本文の残りの部分、すなわち14節と15節にある「癒やし後の宣教」について見ていこう。

XI. ヨハネ5:14-15；癒やし後の宣教

A. 宗教指導者たちとの一幕の後、この男は主に礼拝し、受けた癒やしに感謝するため、おそらく神殿へと向かった。そしてそこで、イエスは彼を見つけたのだ。

1. そして、これは単なる「あら、ここで会うとは」といったような偶然の出会いではなかった。文面からは、イエスが積極的に彼を探し出したことがうかがえる。イエスはこの男と再び会うことを意図していたのだ。なぜなら、イエスは単にこの男に肉体的な癒やしをもたらすことだけでなく、この男の霊的な安寧をも気にかけていたからである。

- B. イエスはその男に近づき、「見よ、あなたは癒された」と言った。ここでの「癒された」とは、完全に元通りになった、完全な状態に戻ったという意味だ。そしてイエスは続けて、「もう罪を犯してはならない。さもないと、もっと悪いことがあなたに降りかかるだろう」と言った。
1. 38年間も不自由な身として生きるよりも、さらに悪いこととは何だろうか。唯一の合理的な説明は、地獄で永遠を過ごすことである。
 2. その男には、この地上であと38年生きる時間は残されていなかった。彼がいつ病気になる、足が不自由になったのかは分からないが、一世紀の平均寿命はそれほど長くなかった。
 3. したがって、イエスが語っているのは、死後の世界へと続く、より重い罰であることは明らかだ。イエスは彼に地獄の危険を警告し、罪から悔い改め、罪の中に生きるのをやめ、主のために生き始めるよう命じていたのだ。
- C. イエスは、この男の肉体的・霊的な幸福を気にかけていた。イエスは、肉体の癒やしを受けた後、彼に新しい人生を霊的なことに集中するよう勧めたのだ。
1. そして、悔い改めの最初の行いとして、彼は宗教指導者たちのところへ行き、自分を癒したのはイエスであると証した。
 - a. これを、男がイエスを密告したのだと考える人もいるが、私はそうは思わない。この男はイエスの勧めに心から応じ、主の導きによって、イエスが自分の人生に触れてくださったこと、イエスが生涯の病を癒してくれたことを、すべての人、とりわけ宗教指導者たちに知らせに行くべきだと感じたのだと思う。
 - b. 彼は彼らのもとに戻って、「イエスが『床を担いで歩け』と言ったのだ」とは言わなかった。彼は行って、「イエスが彼を癒してくれたのだ」と告げたのだ。私を癒し、完全な者にしてくださったのはイエスであり、私を健やかにしてくださったのもイエスである。
 2. 神があなたの人生に触れ、癒しをもたらされたとき、私たちの応答は霊的な悔い改めと道徳的な変革であるべきだ。
 3. イエスは、この男に、注がれた恵みへの応答として、変えられた人生を歩むよう呼びかけていた。**そして神は、私たちに対して同じことを望み、期待しているのだ。**
 4. もしあなたが神の驚くべき恵みを受けた者であるなら、その恵みに応え、神に献身して生きることを期待されている。決して神に報いることができるわけでも、神が報いを期待しているわけでもない。それは不可能だ。神もそれを求めてはいない。
 5. しかし、私たちの内には、感謝の心から、生き方を変える何かがあるべきだ。私が皆に願うのは、主への誉れと栄光をもたらすような人生を歩むことだ。神の恵みを濫用することなく、それを大切にし、常に感謝し続けることだ。
 6. アーメン？　アーメン。祈ろう。